

一掬いのご馳走 李晴 (2001年3月号より)

子供の頃、冬になると新年を迎えるのが待ち遠しかった。年が改まると、その日学校で先生と生徒全員が一緒に食事をする決まりになっていた。私たちの学校は先生が一人と生徒が数十人だけだったが、その他に数十頭の羊が飼われていた。冬に羊が食べる草は全部生徒たちが刈り取って用意をするため、新年の会食はいわばその労をねぎらうといったものだった。

草の刈り取りは決してなまやさしいものではなかった。学校の決まりでは、学年によって刈り取る草は何百斤と決まっていた。私が1年生の時には百斤(50kg)の草を刈らなければならなかった。その年私は6歳になったばかりで、自分だけでは刈り取ることが出来なかった。家に帰り、母に泣きついたが、その頃の母は病身でとても外で働くことなどできず、どうしようもなかった。そこで私は曾祖父に泣きついた。曾祖父は父の祖父で、そのとき70歳をとくに過ぎていたが、私の目には家の中で唯一私を可愛がってくれる、壮健な人に見えた。太陽が山に落ちるころになって、曾祖父は案の定、草を一括り背負って戻ってきた。私の頭をなでながら曾祖父は半分とがめるように言った。「自分で背負って持っていくんだぞ！」とても出来ない話だった。結局はやはり曾祖父が草の束を背負って学校へと運んでいってくれた。私は曾祖父のはるか後ろから着いてゆき、曾祖父のゆっくりと動く後ろ姿を見て、心中とても恥ずかしい思いをしていた。2年生になると、刈り取りの草

は二百斤にふえた。そしてやはり私は母に泣きつき、曾祖父に泣きついた。5年生になって私はどうにか自分でもいくらかの草を集めることが出来た。しかし、5百斤もの草は、やはり曾祖父の助けが無ければまかなえなかった。

あの秋の日々、曾祖父はしょっちゅう山へ入り、私のために一括り、一括りと草を刈り集めてくれたものだった。

年の改まりを告げる鐘の音が鳴り響くころには、もうあの草の刈り取りの辛さやいかんともしがたい切なさは、私たちから遠く離れたものとなっていた。ある年の冬、学校は十数匹の羊をと殺し、元日に先生が私たち生徒に食べさせてくれることになった。私たちは大喜びで家を出、早々と学校へと向かった。生徒たちは箸を持ち、碗を抱え、ある者は新しい服を着てやってきた。教室や校庭のあちらこちらから私たちの笑い声や歌声が聞こえていた。男の子たちが持ってきた爆竹は樹の枝に掛けられ、ぱちぱちと賑やかな音をたてていた。朝が過ぎてしまった、しかし先生の顔は見えない。昼が過ぎていった、それでも先生がやって来て私たちにご馳走を食べようと大声で呼ぶことはなかった。皆はお腹をすかせ、すっかり元気を無くしてしまった。炉を取り囲むようにして座り込み、箸で茶碗を叩いた。「東の風が吹き、戦の太鼓を叩く、いまこの世界で結局誰が誰を恐れると・・・」がやがやしているところに先生がやって来た。先生の顔は赤くてらてらとしており、酒くさかった。

私たちの先生は他所から来た人だった。小さく尖った顔立ちで、年は30を過ぎ、常日頃はとても厳粛な様子の先生だった。その日先生はむしろ嬉々とした様子で私たちに向かって言った。「君たち来なさい、7人か8人、来なさい」私たちは黙ってしまい、誰も身動きをする者はいなかった。とうとう、入り口近くにいた数人が先生の後について職務室の方へと行った。私もその後ろについていった。先生の職務室は先生の寝室でもあった。私たちが部屋に入ったとき、部屋の中には靄が立ち込めていて、何も見えなかった。しかし、濃厚な羊の肉の香りは部屋中に充満し、酔っ払っている人たちから漂ってくる酒の匂いの中からも羊の肉の芳しい香りがしていた。私たちは皆思わず口からよだれをたらしてしまった。

先生のオンドルの上には何人かの人が座っていたが、彼らが誰で、何の話をしていたのかはよく分らなかった。先生は私たちを一列に並ばせ、羊の肉が入った大きな深皿を両手で持ち運びテーブルの上に置いた。羊の肉はとっくに料理されていて、細かく切り碎かれ、おまけに深皿の中で凍っていて、まるで白っぽい草の切り株のように見えた。そして、その上には小さな氷のかけらがくっついていて、

先生は私たちに向かって言った。「今日は火の具合が悪くて上手く出来なかった。君たち、こうやって搦んで食べて、もうそれでいいだろう」私たちは互いに顔を見合わせた。どうしたら良いのか分らなかった。ただ先生が両手を伸ばして深皿から掬い上げ私たちの前にやってきたのが見えた。「手を出して！」私たちは恐る恐るしもやけで赤くなった小さな手を伸ばした。先生はすぐに私たち一人一人の手の中に一握みの羊の肉を放った。みんなもうとっくにお腹が空いていたまらなかつた、頭を低くして羊の細切れを口の中に入れた。すっかり冷たくなった羊の肉はとても硬かった。歯に染みる冷たさと悔しさとで私たちは皆涙を流した。

何年か後、私たちの先生はついに村中の人の罵声の中、村を出ていった。私もまた中学に入り、遠くへ行った。しかし、あの冷たい羊肉、あの歯軋りをするような悔しさ、草の刈り取りの時の苦労と曾祖父のゆっくりと動いてゆく後ろ姿は、いつも新年のざわめきのなかで、はるか遠くしかしはっきりと私の心に浮かび上がってくる。

(翻訳：岩田温子)